
不完全少年

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不完全少年

【Nコード】

N4588R

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

少年は本当の自分を探すために家出する。抑圧。自由。小さな世界を知るための旅。少女は橋を渡る。公園の女は歌う。男は人を殺す。「僕には何か足りてないんだ」そして少年は逆さになった。

※真昼がカエデ・アグ先生が好きすぎてやってみた文体パロディ。昼の十二時に一日一話の更新を目指す。

不完全少年

今日をもちまして晴れて13歳になりました。外国では縁起の悪いの数字だとか。由来は知らない。だけどこれからいろんな不幸が僕を襲うであろうことは予想できた。

僕は一つ決意をする。与えられた四畳半を捨てるための決意。溜めに溜めたお年玉は今年で十五万円になる。

家にある物の一つ一つにお別れを告げる。毎日眠った布団。よく芯が折れる鉛筆。あまり使わなかった勉強道具。妹と取り合いをしたクマのぬいぐるみ。大好きだったゲーム機。ラッパ飲みして怒られたお茶のボトル。名前のわからないキャラクターの描かれたコップ。数を挙げればきりがなさそうなら達。

最後にこれからしばらく会えなくなる父さんと母さんの匂いを肺一杯に吸い込んだ。それから息を止める。匂いは血液に溶けて体の中を巡るはずだ。息を吐き出した。

化学繊維で作られた小さな財布と少しのお菓子と僕だけを持って、僕は初めて子供から少年になった。

行って来ます。

誰もいない家を出る。

風が吹いた。それは生ぬるくてどこか古臭い感じがする。雨が降る気がした。傘は持ってきていない。僕は公園に逃げ込もうかなと思っただけ、遠くまで歩こうと決めた。家の周りにいると父さんと母さんに見つかってしまう。何もかも捨てた気分になってみると新しいものだらけだ。コンクリートの壁のざらざらを手でなぞりながら歩いた。横断歩道は黒いところだけ。マンホールは踏む。いままで行ったことのない場所を求めて、僕は歩き続ける。どこか急ぎ足の人たちが次々に流れていく。それは完全な世界だった。

「僕には何か足りてない」

そんな気がした。自動的な世界が一つ終わりを告げる。煙草の白い煙を吐いているおじさんがガードレールに腰掛けて人を見ていた。僕はなんだかみんなが白い煙を吐き出しているのに、自分だけが青い煙を吐いているように思った。世界は真っ白だ。理由はわからない。その中できつと僕は世界の色を変える権利を得た。一緒じゃないといけない理由なんて、きつとない。

雨が降る。しとしと弱い涙雨。煙が晴れて世界が一つ透明になる。そこに青い色をつけよう。色の塗り方はまだわからない。これから、覚えればいい。

少女

ある雨の日の夜。少女は自転車を止めて橋から飛び降りようとする。迷いながら橋の欄干に手をかけて体を越えさせてその上に座った。生きていても死んでいても意味なんてない。それは真理だ。ならなんのために生きるのか。透明な世界は若い意思を拒絶する。変えることなんて誰にもできはしない。これからどんどん不幸になるならば、いつそのこといなくなってしまえばいい。

猫が一匹通りかかった。何かに疲れた様子で雨に濡れている。擦り寄ってはこないが逃げもしない。少女はふとそれを抱き上げたくなつて橋から地面に戻る。もし猫が大人しく少女に抱かれたならば飛び降りるのはやめよう。猫が逃げてしまったならば、飛び降りよう。少女は決めた。ずぶ濡れの猫に近づく。猫は動かなかった。だが少女が手を伸ばした瞬間に駆け出した。まるで何か恐ろしいものを見たかのように。

「……あはははは」

少女は笑いながら泣いた。誰も自分など必要としていないのだと突きつけられたように感じた。ずぶ濡れの少年が橋の向こうに現れたのはその時だった。青い少年だった。夜に青が浮き上がって見えた。猫を抱き上げていた。こちらに近づいてくる。

「これ、君の？」

「はい？」

はい。と少年は捉えたようだ。猫をこっちに突き出してくる。少女はなんとなくそれを受け取った。猫は逃げない。大きな瞳で少女を見返してくる。透明な青い目だった。きれいだ。

少年は引き返して雨の夜に消えた。手の中の猫が少女の頬を舐めた。ざらざらとした舌が何かを削っていく。猫の体は濡れているがそれでも暖かい。少女の手に力がこもった。「ナ！」鋭く一声鳴くと猫は少女の手から逃げていった。爪が手を掠める。猫は一度振り

返る。どこか名残惜しそうに見える。駆け出した猫はすぐに見えなくなつた。

「待って！」

少女はそれを追つて、飛び降りるはずだった橋を渡つた。小さな引っかけ傷のできた手は熱く、細い痛みが胸に残る。

不完全少年

隣街まで歩いて、似たような風景ばかりだ。なんだ、どこにいても世界ってあんまり変わらない。僕は落胆し、バッグを開けた。チョコレートを齧ると口の中が甘くなる。どこまでも地続きな世界ではこのチョコレートもコンビ二に入れば買うことができる。この世界は複製品ばかりだ。物もそう。人もそう。同じような家と同じような物に同じような人ばかりがいる。そして濡れたそれらはみんな透明だった。僕は青い。だけどそれは僕が青だと自分が決めたからだ。いつか僕も雨に濡れると透明な、白になる。

「白くなんてなってやるもんか」

呟くと勇気が出た。でも寒いので公園に逃げ込む。大きめの滑り台の下に身を隠す。

さあさあさあさあさあさあ。と、雨の音だけが耳を切り裂き続ける。同じようではんの少しだけ違う音が流れていく。どんな声よりも冷たく、どんな音より心地いい。僕の体は凍り付いていく。濡れた服が重たい。バッグの中まで濡れていた。何もかもが冷たい中ですべて投げ出すために僕は目を閉じて眠ろうとした。だけど石で出来た壁はゴツゴツしていて寝心地が悪い。眠れない気がする。

音に雑音が混じった。喉を無理矢理傷つけて歌っているような声だ。僕は外を見た。風で歪んだ雨が顔に吹きつける。その向こうには灰色の女の人が風に立ち向かっていた。傘を差している。透明な世界の中で彼女は灰色だ。服も傘も髪も灰色だ。ついでに振り返った時の瞳も灰色な気がしたが、それは黒だった。

彼女

彼女は、今日は雨だったけれど気にせずに出掛けた。むしろ雨は好ましい。声を打ち落としてくれる。へたくそな歌を誰にも聞かせずに済む。

住宅街から少し離れた深夜の公園には誰もいない。だから彼女はひっそりと歌う。カラオケボックスに毎日通うにはお金が掛かる。そんな小さなストレス発散。

彼女は黒ではない。時間に縛られた社会人や、楽しいことのない学生のような黒々としたストレスを溜め込んでいるわけではなかった。ただほんの少しの気晴らしだ。

かといって白でもない。彼女には絶対的にお金が不足していた。借金があるわけではない。だけど高校を奨学金で通わせて貰っていて、その返済を親に任せていることがほんの少しの彼女の負担になっている。大学にはいかなかったが、就職もしなかった。ひっそりとバツイチ。だから気晴らしは必要だ。

「おーれーはジャイアーン、ガーキダイショー」

歌はなんでもよかった。大声で歌うことだけでいい。うまく歌う必要もない。だから思うままに口を動かした。道行く人にたまに変な目で見られたら心無しか彼女の声は小さくなった。羞恥心は歌声の大敵だ。そういう時はめげずに数分掛けて元の大きさを取り戻す。何人も人が通った時は小さな声でしか歌えないままですごすこと家に引っ込む。そうした時は翌日のバイトでだいたい失敗する。そんな小心者の彼女の単独ライブに、滑り台の下からたった一人の観客があわれた。

「ありゃ。先客か。恥ずかしいところ見られたわね」

「こ、こんばんは」

「あんた、どこの子？　こんなところで何してんの？」

「家無き子です」

「ああそう。わからん。お姉さん日本語苦手なの。とりあえず、ずぶ濡れね」

「お気になさらず」

「大人はそういう訳にはいかないの。うち来なさいな。サイズは合わないだろうけど服とシャワーくらい貸してあげるから」

「ほんとに構いません。それよりもっと聴かせてください」

「なんて恥ずかしいことを普通に言うんだ、この子は」

少年は滑り台の下に戻る。照れながら、彼女は再び歌い始めた。声を世界に振りまく。彼女の周囲に灰色が満ちていく。白と黒の間点。きつと白と透明の次に多い色。だがそれは少年にとって自分の色以外に世界で初めて見つけた色だった。

彼女はしばらく歌っていた。いつもより声が小さいのは、雨のせいではない。少年を見ないようにしていたが、見ないようにするということはすなわち意識するということに他ならなくて、彼女は滑り台の下を覗き込んだ。

少年が濡れた体で眠っていた。

「断ったんだから風邪引いたりしても自業自得だよねえ」

彼女は続きを歌う。歌おうとする。だけど。

「ああ……、あたしってお人よし」

彼女は一度傘を手放して、少年を背負った。

傘を取り直す。少年に雨が当たらないように。

不完全少年

目を覚ませば暖かった。布団がある。ベッドだ。僕は自分が家出し損ねたのかと思って嫌になった。布団を剥がした。半裸だった。隣に灰色の人が寝ていた。

「はい？」

僕は顔を擦る。見間違いじゃなく、灰色のお姉さんが寝ている。僕の隣で。……あれ？ 何があった？ 僕は一体何をしたんだ。公園に行ったことまでは覚えている。雨が降っていて、僕はそれを滑り台の下で聞いていたはずだ。急激に鼻がムズムズしてきた。

「くしゅん」

ティッシュの場所がわからなくて僕は盛大に鼻水を飛ばした。辛うじてベッドからは顔を背ける。板張りの床に粘ついた液体がへばつく。なんとかしなきゃと思う前に女の人の手が僕の腰を掴んでいた。爪が立っていて痛い。

「はれ……？」

女の人は僕を手前に引っ張る。肉に爪が食い込んでぎゃあああなまま僕はベッドに尻餅をつく。

「なんだこれ。……ああ、昨日の困ったクンか」

そう言ったきり、灰色の人はまた布団を被ってしまった。

……ああ、思い出してきた。歌声が聞こえてきて灰色の女の人で寝ちゃったんだ。それで、多分家に連れてきてもらって服はびちよびちよだったから脱がされた、と。

無防備な人だな！ 僕、中学生だぞ。エッチな知識あるぞ！ 襲っちゃうぞ！ ……出来もしないことを思いながらティッシュを探した。テーブルの上に普通に置かれていた。腰の血と鼻水をふき取った。それからベッドの傍に畳まれていた服を着た。ぶかぶかだ。

年上のお兄さんが着るような服だ。ズボンはベルトで無理矢理に縛って落ちてこないようにした。すごく変だ。でも僕は青色だから透明に比べて変なくらいが丁度いいのかもしれない。出て行こうと思う。でも僕の服を返して貰わないといけない。見た目は別にいいんだけど、この服すごく動き辛い。揺すって起こそうかなと思ったけれど、女の人の体に触れてしまうのを考えるとすごくギクシャクする。ええっと……。

「ねえ困ったクン、今何時？」

「十一時、八分です」

すごい勢いで布団が飛び上がった。

「ぎゃああああ。遅刻遅刻！」

叫びながら、個室に入っていく。後ろから覗いてみたら、お風呂場かトイレみたいだ。洗面台がついてる。女の人はこちらに跳ねた髪の毛と格闘してる。でも諦めて出てきて「あ、困った君。冷蔵庫の中の物は基本的に食べていいけどあんまりいっぱい食べるとあたしが困るからほどほどにね」と言って、出て行った。僕は着替えを探した。

彼

彼は人を殺してみようかと思った。理由はない、わけじゃないが個人に対して特別恨みがあったのことはない。彼はどうでもよかった。彼にとって命は、いいや、世界中で起きているあらゆることがどうでもいい。そして彼に関わることは辛いことだらけだ。楽しいことがない。女の一人でもいれば変わるのかもしれない。だが彼はモテない。幼少期についた心の傷がどうたらこうたらで対人スキルに絶望的な問題がある。スーパーの裏方のアルバイトをしているが、そこでも人と会話をすることはほとんどなかった。

男は世界をどうでもよくなくするために、確かに努力をした。煙草、酒、風俗、ギャンブル、麻薬、熱中できるものを探してカードゲームや釣りにも手を出した。だが男の快楽神経を揺るがすものは何もなかった。男は渴いている。渴きを癒すものを見つけれずにいる。だから人を殺してみることにした。動物を殺すのは以前にやったことがある。それも男を癒さなかった。だが動物殺しと人間殺しは似て非なるものだ。男は最近になって感じ始めた。だって動物を殺してしまつて自首するやつはほとんどいないが、人間を殺してしまつて自首するやつはたまにいる。

生きている理由はない。だからただ人生を楽しめばいい。楽しみ方は人それぞれだ。男にとってはそれは人を殺すことかもしれない。日本では酒鬼薔薇聖斗くらいしか思いつかないが、アメリカには快楽殺人者が何人もいるとテレビでやっていた。男はもしかしたら自分がその一人かもしれないと思う。いいや、何をしても楽しくない男にとってそれは唯一ともいえる救いだった。これが楽しくなければ男は死のうと考えている。

その日は弱い雨の降る特別暗い夜だった。男は橋の下で雨をしのいで、そのまま眠ってしまった初老のホームレスに狙いを定めてい

た。狙ったのが彼なのは、単に外を歩いていて最初に目に止まったのが彼だっただけで深い理由はない。少年でも少女でも灰色の女でも、言ってしまうえば誰でもよかった。男は皮製の鞆から昼間買ったナイフを抜く。月明かりは橋の下までは照らさない。初老の男性は声も挙げずに死んだ。死ぬ前にほんの少しだけ目を覚ましたが喉を裂かれていて声を出すことができない。盛大に血を撒き散らして死ぬホームレスを前に男は「なんだ。殺人というのはこの程度なのか」と思った。もしくは別に何も思わなかった。死のう、としたが自分の首をナイフで切るのは恐いし、無理がある。なので明日、首を吊るためのロープやらなにやらを買ってこようと思って男は帰路に着く。

そして翌日の昼頃までしっかり眠った男はなんとなくテレビをつけた。初老のホームレスが殺害されていたというニュースを見る。現場を連想し、散っている赤い血から肉を思い出し、そういえばカニバリズムはまだやっていなかったなと思って男はもう少しだけ生きることを決めた。

不完全少年

着替えは乾燥機の中から見つかった。着替えて、僕は灰色の人の家を出た。僕は家出したんだ。だから家があっちゃダメだ。くしゅん。外はもう乾いていた。消え残る雨の匂いがまだ透明を燻らせている。すべてが白に染まる前に僕は歩き出した。

雨が降ったあとの街は臭い。水が腐った匂い。何かが死んでる。昼の街まで歩いていくといろんな人がいるけれど、自分の色を持った人には出会わない。

繁華街には初めてがあふれていた。ゲームセンターは悪の巣窟だって友達が行ってたから近づくのはやめておく。大きな本屋さん椅子に座って読んでいても怒られないらしい。でも漫画はみんな包装が掛かっていた。小説は大人の読み物で僕みたいな若輩者にはちよっと早い。僕は漫画雑誌を買ってマクドナルドに行った。一人で入るのは初めてだ。僕は照り焼きバーガーのセットを頼んで少し待つ。昨日からチョコレートしか食べていなかったのでお腹が空いている。運ばれてきたそれを口に詰め込む。美味しい。パンと肉が喉を下る。ポテトとジュースも直ぐになくなった。ゆっくりと雑誌を捲る。普段読まない漫画も全部読んだ。読み終わってから、次にどこへ行こうか考える。ここにはいろんな物がある。スーパーや古本屋さん。カラオケボックス。その他諸々。それは全部家や学校にはないものばかりだ。一つずつ回って行こう。せつかくの家出だ。僕はいま自由なのだ。学校なんていなくていい。早起きする必要もない。遊びたいだけ、遊べばいい。

少女

少女の世界はいつも黒くて黒くて黒かった。少女自身に対して具体的な何かを向けられた訳ではない。ありがちなじめや男女の盛りあいはいつも少女の斜め前で行われてきた。誰かが傷つき、嘆いている姿を見るのは少女にとって苦痛だった。何かしたいと思って、声を掛けた。だけど。

「あんたはいいよね。かわいいから」

自分の容姿を誰かと比べてきれいだと感じたことはない。優越感に浸っているつもりもない。むしろ少女はとても自分の顔がきらいだ。それでも慰めの言葉を誰かに向けると決まってこれが返ってくる。痛かった。小さな黒達は少しずつ少女を傷だらけにする。

少女は探していた。少年でもなく、青い目をした猫でもない。自分が生きていていい理由を探していた。どこにあるかはわからない。手がかりさえない。だけどどこかにきつとあるはずだと信じて、少女は塾をサボってみる。いつもの生活を少しだけ変える。

帰宅のための社会人がわんさか詰め込まれた駅、どこかでギター、人の声、携帯電話のボタンを叩く、誰もが通り過ぎていく。「ドアが閉まります」のアナウンスがただでさえ焦っている人々をまだ急かす。あの電車はどこへ行くのか。それは電光掲示板を見ればすぐにわかる。地名だけを知っていて中身を知らないどこか。

逃げ出したい？

自分に問いかける。答えはノーだった。少女はいつも戦ってきた。だから少女の色は赤だ。自分の血で、真っ赤に染まっている。

不完全少年

夕方にもなると大方の場所は回り尽くして、僕は幸福な疲労感の中で寝る場所を探した。直接風の当たる場所は流石に風邪を引いてしまう。さてさてどこで眠ろうかと考えた時、思い浮かんだのはやっぱりあの公園だ。最近の公園には遊具がない。白い人たちはみんな自分達以外の何かのせいになりたい。子供は外で遊ぶのが正しい。でも遊具は危ないからダメ。家の中にいるのはゲームのせい。間違いには気づいてる。間違えたことを認めたくない。幾つか公園を見ただけ、大きな滑り台の残っている公園はあそこしかなかった。

僕は灰色の女の人を思い出す。また会うかな？　いいや、きつと会わないだろう。大人は忙しい。父さんと母さんが言ってた。だから毎日夜の公園にやってきて歌を歌う大人なんて滅多にいないはずだ。

滑り台の下、一番奥に隠れると風は僕のところまで届かない。夜は暗い。僕は青い。

「あれ……？」

ほんの少し自分の青が水色を混ぜたように見えて、僕は目を凝らした。その時にはもうわからない。白が混ざっている？

ありえない。そんなはずはない。だって僕は青であり続けるために家を出たのに。だけど僕にはそれが気のせいだとはどうしても思えなかった。

彼女

アルバイトは恐らく現状の彼女にとって一番のストレスの原因だ。彼女は学校の授業が苦手だった。退屈で仕方なかった。だから大抵こっそりとイヤホンを挿して音楽を聴いたり、寝たり、ノートに落書きをしたりしていた。学校自体が中の中だったのでそれくらいは許された。彼女の成績がクラス内でもそれなりによかったことが教師達の黙認に拍車を掛けた。一人だけ、そういうことを絶対に許さなかった先生がいた。いまはどうしてるのかな、と、なんとなく思う。あの先生の言うことをもつとよく聞いておけばよかった気がする。あの頃と同じような退屈を彼女はいま感じている。

人間は後悔する生き物だ。どんな生き方を選んでもあとできっと後悔する。あの頃しかできない何かがあったんじゃないか、もし結婚せずに大学にいらしていたら、あんな無責任な人間なんかとさっさと別れていたら。彼女は灰色だ。

黒のように何かを塗り潰せるほど強くなく、白のように何かに染まるには濁りすぎている。

アルバイトが終わり、彼女は家に戻って求人雑誌を開きながら、スーパーで買った半額のシールつきの夕ご飯を食べる。少年を泊めていたはずだったがいない。無くなってる物も、多分だがない。貸していた服はきれいに畳まれている。捨てられずにいる、彼女の昔の残滓。

帰る前からいらないような気はしていた。少年は、外見から察するに中学生くらい。彼女のその時代は周りがみんな敵に見える時期だった。誰でもそういう経験はきつとある。親切なんて簡単に受け取れるものでもない。

「さあて、今日も行きますか」

昨日と違って今日は晴れ。少し離れた公園へ、自分の声だけを持って彼女は向かう。そういえば昨日はあまり歌えなかったけど、今日はバイトで失敗しなかったなと思うた。

不完全少年

夜は心地よく僕を蝕んだ。背中から伝わる冷たさが丁度いい。理バッグを枕に眠っているとどこからか歌が聞こえてきた。ひどくバカげた理想を歌った歌だ。

「僕らのエゴになんて意味はなくて、欲張る必要も飢える必要もなく、みんなで世界の全てを分かち合うことができた。」
そんなのはもちろん安全圏から物を言ってるやつ之余裕の歌だ。だけど歌われて初めてそれに気づく人もいるのかもしれない。

僕らの頭の上には空が広がっている。足元には地面が続いている。目を開けると一面の優しい灰色が僕を包んでいた。天国なんかじゃなくてましてや地獄であるはずのない世界。白でも黒でもない、あまりにも現実な灰色。生きることほど美しくはなく、死ぬことほど悲しくはない。惰性の生存。誰かの弱い悲しみ。それはあるいは世界の色だったのかもしれない。僕だけじゃなくてみんな色を持っていてそれに気づかなかっただけなのかもしれない。僕はベッドから出ようとした。灰色に触れたかった。そして自分の体が動かないことに気づいた。

それから目を覚ました。朝日は高く、街はギラギラと輝いて誰かを急かしている。僕は誰にも気づかれずに少し泣いた。あの優しい灰色はどこにもなくて、世界はどこまでも白かった。

彼

彼はアルバイトのためにアパートを出た。出勤のための十数分だけで三人の警察官を見た。彼の心拍数は平常時と比べて特別変わらない。表情にも、歩き方にも変化はない。彼は何か楽しいことはないかなあと考えていた。いつもと同じ道。なんの希望もなく、ただ食べるためだけに仕事に向かう。この道は彼にとって絶望の象徴だったかもしれない。彼は普通だった。特別仕事ができるわけではなかったし、できないわけでもなかった。ただ目が気に食わないと言われていた。理由はわからない。視力がよくないせいで細く、誰かを敵視し続けていたからかもしれない。ただ彼自身も自分の目が嫌いだった。男の目は常に一定の腐臭を振り撒いている。

スーパーに着いた男は、適当に挨拶をして、着替え、仕事を始めた。黙々と手を動かすだけ。必要な会話以外は最小限しかしない。誰かに気味が悪いと言われる。それにも慣れている。きつとそのうちのこの職場も辞めるだろう。捕まるのとどちらが早いかな。考えることに意味はなかった。留置所の中のほうが、彼にとってももしかしたらマシかもしれない。いいや、こちらのほうがマシだと思い直す。なぜならあちらでは死ぬことができないからだ。自殺する自由がある。いつでも自分の命を断つことができる。少なくともそういう意識を持つことができる。それだけで男の心は少し許された。

仕事が終わる、彼はホームセンターで釘とロープと金槌を買った。きつとこれも楽しくないのだろう、という予感があったからだ。帰りに通った公園の近くで、一人で歩いていた少年を見つける。彼は自分がいま刃物を持ってきていないことを悔やんだ。家に帰ってから、彼は「ああ、ここまで拉致してくればよかったのか」と思い小さく落胆した。そして次に人気のないところで誰かを見つけたときはそうしようと決めた。

不完全少年

繁華街にもう一度向かう。昨日と同じように本屋さんに行って、昨日とは違う漫画雑誌を買ってからマクドナルドに入った。照り焼きバーガーのセットは昨日より美味しくない。同じようにお腹は空いてるはずなのに。どうしてだろう。漫画雑誌も、映画館も、スーパーも、何もかもが昨日より薄い。……ああ、世界の何かが変わったんじゃない。僕が少し白くなったんだ。人間は慣れていく。昨日楽しかったことが今日の普通になる。そうして気づかないうちに日常は白く染まる。僕が白くなる。僕は白くなんてならない。それがどれだけ難しいことか僕は知った。

「どうりでみんな白い訳だ」

僕は繁華街を出た。何かを探して歩くつもりだった。だけど雪の降るようなこの真っ白な世界に何があるのか、僕にもわからなかった。ひどく疲れていた。ガードレールに腰掛ける。

「僕はここで何を探してるんだろう」

呟いたときそこにいたのは、女の子だった。

「あ、あなた。こないだの夜の」

「あ、橋の女の子」

「あの時はどうもありがとう」

「どういたしまして」

「あなたはここで何をしてるの？ 学校に行かないといけない時間でしょう」

「世界に色を塗る方法を探してるんだ。家出中だから学校は行かなくていい。君は？ 学校は？」

「私は生きてる理由を探してるの。学校は、休憩中。傷が治ったらまた行くつもり」

「生きてる理由なんてあるのかな」

「きつとあるわ。だって生まれたんだもの」

「そうか。じゃあ、あるのかもしれないね」

「ねえ。世界には色があるの？」

「うん。真っ白なんだ。どこの誰も、僕の目に見えるのは。僕は青でありたい」

「私も白い？」

「……ううん。君は赤い。なんとなくだけど」

「へえ。なんだか素敵ね」

「そうかな」

「そうよ」

「じゃあ、そうなんだろうね」

女の子は少し笑った。それは自然な笑みじゃなくて痛みを堪えるような笑みが癖になったものだ。かさぶたの間から血が滲んでる。赤が流れる。そんな色もあるのか。僕は何か言おうとした。彼女の傷を癒す言葉を。だけど自分の口から何も出てこない。僕は大人になりたいと初めて思った。こんな時に優しい言葉が言えるような大人に。

「ねえ、少し歩かない？ 君となら楽しそう」

「喜んで」

僕らは手を繋いだ。

少女

少女は少年と手を繋いで映画を見た。本屋さんに行って好きな小説のことを話した。カラオケボックスに行って大声で歌った。マクドナルドでハンバーガーを食べた。

気づけば夕方で、少女は今日も塾をさぼってしまっている。そんなことはどうでもよかった。少女はいま楽しんでいる。それでこそ、学校を休んだ価値があるものだ、少女は思う。

青い少年はそこにいる。ずっと一緒にいてくれる訳がないのはわかっている。自分は少年の名前すら知らない。どこの学校に通っていない。何年生なのかも知らない。住所も知らないし、電話番号も知らない。今日少女は家に帰るだろう。布団に入って彼を思い出す。そのうち眠りにつく。明日になれば朝、教科書とノートを用意して、朝食を食べ、学校に行く。いつも通りのクラスメイト達が少女を傷つけるかもしれない。だけど少女はきつともう橋から飛び降りようとしたりしない。

少女は一つ答えを見つけたような気がする。生きていていい理由。それは生きていたいからだ。死にたくないのではない。少女はいま、確かに生きていたかった。流れ出る一滴の血すら愛おしい。それを舐め取ると甘い、だけど鉄の味が広がる。命の味だ。少女は赤い。全身全霊で今を生きるために、命の色をしている。

体のどこからか、かさぶたが一つ剥がれた。赤味の残る未成熟な皮膚が恐る恐る世界に触れる。そして馴染んでいく。大丈夫。きつと次の黒い刃は、もう少女を傷つけることはできない。

「もうこんな時間。帰らないといけないわ」

「そうか。今日は楽しかったよ」

「私も。じゃあ、機会があればまた」

家の電話番号を彼女が教えなかったのは、なんとなく恥ずかしかったからだ。

遅くになって父親が帰ってきて「今日学校を休んだのか？」と訊いた。少女は少し気まずくて一度頷き、そのまま俯く。

父親はゆっくりと何かに頷いた。それから「クセになるといけない。明日からはきちんと行くようにしなさい」と言う。

叱られないことを不思議に思いながら少女は自分の部屋でベッドに入る。少年を思い出し、電話番号を教えなかったことを、それから三年間たっぷり後悔した。

不完全少年

ぐどぐどのホラー映画も、謎解きが鮮やかなミステリー小説も僕はそんなに好きじゃないけれど、彼女と一緒にだから見て聴いた。カラオケボックスではあまり得意じゃない歌をたくさん歌った。時間がすぎるのが早かった。世界が僕らを置いていってしまったように感じた。太陽は沈んで月が昇る。三日月だった。細い体を強く光らせている。僕は満月よりこんな、どこか欠けたような月のほうが好きだ。自分に似ているからかもしれない。何か足りていない、不完全な月。

マクドナルドでハンバーガーを食べ終わって、女の子は帰るという。不意打ちだった。なんとなく僕らはこれからずっと一緒に居続けるような気がしていた。そんな思い込み。忘れていた。世界は廻っているのだ。

「そうか。今日は楽しかったよ」

僕は言う。そして自分が少し青色を取り戻していることに気づく。女の子は帰って行った。後姿を目で追いかけて、きれいな子だったなといまさら思った。

「僕も帰ろう」

どこへ？ あの公園へ。

僕は席を立った。二人分の食べ跡はそのまま置いておいたら店員さんが片付けてくれる。そうしないと次の人が座れないから。店を出るときにレジの人と目があった。

「あ」

「あ」

気づいたのは半秒あっちのほうが早かった。灰色の女の人がいた。「なにになに困ったクンこんなところでご飯食べてたの？ ちよつとこっち来なさいよ。暇ってほどじゃないけど暇なの」

レジに並んでる人はいなかったけど、他のお客の迷惑とか考えないで女の人を僕を呼ぶ。なんだか無視して帰るのはひどい気がする。僕は女の人を見上げた。後ろで他の店員さんが睨んでるけど女の人に気にする気配はない。

彼女

少年を見つけたのは、彼女が制服に着替え、レジに入ってから直ぐのことだった。帰り際に捕まえられたのはきつと運がよかった。

「困ったクンさ。昨日の夜どこにいたの？ 漫画喫茶とかそっち？」

「公園で寝てましたよ」

「え、嘘？ あたし昨日行ったけど、いなかった……、」

客が入ってきたので彼女は視線を切り替える。営業スマイルを作る。

「いらっしやいませ。ご注文をお伺いします。チーズバーガーのセツトにジュシーマックチキンですね。535円になります。千円からお預かりします。465円のお釣ります。少々お待ちください」
お客が行ってから少年に戻る。

「いなかったと思うんだけど」

「なんかすごい転身……」

「これくらい普通だよ。現代人の常識」

表情をくるくる回すことを覚えたのは実は最近のことだ。人間関係にあまり苦勞してこなかったんだなあと彼女は思う。

「家に連絡したの？ きつと心配してるよ」

「どうでしょう。その内ひょっこり帰って来ると思ってるんじゃないでしょうか」

「あれ？ もしかして困ったクンさ。殺人事件のこと知らない？」

「殺人事件？」

「あのね、」

言いかけて彼女は自動ドアを潜り、お客が入ってくるのを見た。いらっしやいませ、と言おうとした口が中途半端な形で止まる。もちろんそれはただのお客かもしれない。けれど彼女にはそうは思えなかった。

「……やあ。久しぶり」

男は真っ直ぐに彼女のほうに歩いてきた。レジなのだから当たり前だ。イラッシャイマセ、ゴチュウモンヲオウカガイシマス。あれほど流暢に話せていた言葉に詰まる。

「どうしてあんたがここにいるのさ？」

あっさりと仮面は剥がれて、脆い素顔が顔になる。

「君に会いにきたんだ」

積み重ねたはずの歳月は彼女を守ってくれなかった。

「義母さんに働いてる場所を教えてもらって……」

「人の親のことを“かあさん”っていうな！」

声が響く。客はみんな驚いて彼女を見る。小心者の彼女は顔を赤くして店の奥に引っ込んだ。

「ダメか……」

男は深く息を吐いた。落胆。諦念。吐息には様々な感情が交じる。

「えっと……？」

「君、由紀子の知り合いかい？」

「えと、違い、いや、そうなのかな？」

「じゃあ、ごめんって伝えておいて」

男は出て行く。背中は頼りない。だけど何かに吹っ切れたように足取りはしっかりとしている。少年はとりあえず伝言を伝えるために彼女を待つ。彼女は逆に足取りは少しふらついていて、だけど表情は穏やかで強い。

「えっと、仕事は……？」

「店長が今日は帰れて。それよか困ったクン。いまからちよつとあたしの部屋来てよ」

「え、いや、あの、」

「いいからさっさと来る」

強引に少年の手をとって彼女は出て行く。街の明かりも公園も目にも止めずに、どんどん進んでいく。アパートの鍵を開け、男が置いていった物を全部出した。

服、歯ブラシ、コップ、CD、本、ギター。

捨てられずにいた彼女の昔を構成していた物。

「あげる」

「え……」

「全部あげる。いらなかったら捨てちゃってもいいから」

それは引き摺っていた黒い彼女。幸せの残滓。もう必要なかったのに捨てられなかった物。手放さなければ始まらないと気づいた。実際には手放したところで何も変わらない。部屋が少し広くなるだけ。それでも捨てるのだ。彼女の心がそう言っている。

彼女は今日も公園に行く。

きつと明日も行くだろう。

心なしかその声は大きくなる。

いつか誰かに響くかもしれない。

不完全少年

受け取ったいろいろを持って僕らは二人で公園に行った。

半分はゴミに出して、もう半分は大切に抱える。

女の人は早々に僕をほっという歌い始める。その歌声は濁った灰色をしている。僕はでたらめにギターを鳴らした。何が上手で何が下手なのかもわからない。だからただでたらめに。

世界は僕たちを抱えて廻り始める。音は洪水で白を押し流す。手にしたギターはいろんな色を振り撒いて、けどまとまった何かを残すことなく消えていく。もっと上手になれたら違うのかもしれない。僕は興奮を自覚する。

「……およ？」

心地いい歌が途切れた。女の人を見る。視線の先には誰かがいた。男だ。

「二人か。片方でいいな」

男は言った。男は黒い。黒くて黒くて黒い。何もかも塗り潰して呑み込んでしまうように。背筋がぞつとする。冷たい。月明かりが男だけを避ける。光は彼を照らさない。誰も彼を照らさない。

「……困ったクン。走れ」

灰色の女の人と言った。僕はできなかった。怖い。足が竦んでるのだ。

「っ……」

街灯に照らされた女の人が唇を噛むのが見えた。そのまま走って公園を出て行った。逃げた。仕方ない。

「悪いな。不運だったと思って諦めてくれ」

気づかないうちにナイフが握られている。刺されるのかなと思った。逃げなきゃとも思った。足が纏れて後ろに倒れた。真上をナイフが通過していった。僕は生きた。でもそれはほんの数秒で、男の

人はもう一回ナイフを振り下ろす。

「わあああああ」

めっちゃくちゃな奇声を挙げながら誰かが走ってきた。黒い男は振り返ってそれを刺す。胸に刺さった。昼間のフラれた人だった。転がって、死んだ。

「……前言撤回だ。運がよかったな」

男はその髪の毛を掴んで引き摺り、街灯の明かりの届かないどこかに消えた。

少し遅れて、「困ったクン、大丈夫!？」

懐中電灯の明かりと何人かのおまわりさんを連れて灰色の女の人に戻ってきた。僕はなんだか頭がガンガンなって、視界がぐるぐると廻り始め、やがて黒くなった。

彼

どこの肉が一番うまいだろうか。彼はしばらく考え、分厚い太股の肉を切り取った。肉きり包丁程度ではなかなか骨の折れる作業ではあったが、彼はやりとげ、薄切りにして熱したフライパンに載せた。ジュウジュウと音を立てて焼けていく。彼は手早く塩胡椒を振るい、肉全体の色が変わるまで辛抱強く待った。出来上がったそれを皿に盛り付けまずは一口食べた。

不味かった。

鉄の味がひどく濃くて食べたものではない。当たり前だ。血抜きもしていない、熟成もさせていない肉がうまいはずがない。だが男にそんな知識はなく、これでこの世には楽しいことなんてなに一つないことが証明された。死のう。彼はあらかじめ打ち付けてあった釘に輪を作ったロープを掛けた。長さも丁度いい。手ごろな椅子がなかったので学生時代の教科書を積んで足場を作る。踏みしめるとまあまあ安定している。首を輪に描掛け、彼は本を蹴った。崩れて、彼の首は空中でぶらんと釣り下がる。苦痛が彼を襲う。息がしたい。息がしたい。息がしたい。いま肺に空気を吸い込んだらとても楽しいのではないかと、ふと彼は考えつく。これほど飢えたことが彼の人生にはいままでなかった。彼は息を吸い込もうとした。ロープに手をかけてもがく。しかし縄は彼の首にしっかりと食い込み、男がその最後の衝動を満たすことはなかった。彼は死んだ。

不完全少年

白い天井を見上げながら目を覚ました。ベッドの感触。硬い枕。ゲーム機。ぬいぐるみ。涙目の妹の顔。さようならをしたモノたちがいっぺんに目に入る。死んだのかなと一瞬思った。だけどすぐに気がついた。

……ああ、帰って来たんだ。

そして気づいた。これらみんなが青色の僕を構成していたモノなんだと。離れてみなければわからなかった。僕は他でもない、ここにいたのだ。

「にいちちゃん」

「うん。にいちちゃんだ」

答えてやると飛びついてきた。お腹の辺りに膝が乗ってとても苦しい。

「にいちちゃんにいちちゃんにいちちゃんにいちちゃん」

妹は僕の胸でしゃくりあげる。膝が乗ってるので僕は苦しいままだ。母さんが入ってきた。

「……心配したんだからね」

「ごめ、ん、な、さい」

妹が僕の頭をポカポカと叩き出す。手加減してない。めっちゃ痛い。母さん止めてよ。

「父さんもいるから、落ち着いたら降りてきなさい」

「ちょ、っと、待っ、て」

妹の手を掴んでなんとか食い止める。

「母さん、ギターは？」

「右側見てみなさい」

見てみた。何もなかった。

「あ、ごめん。母さんから見て右だった」

逆を見た。あのギターがあった。一緒に貰った音楽関係の本もそのままだ。

「あんたが保護されたとき一緒にいた女の人が『彼にあげたんです』って言い張って、折れなかったから、仕方なく貰ってきたわよ」

母さんがドアを閉めて出て行く。

「みい。退いて」

「やだ！」

「お願いだから」

「……むう。仕方がないなあ」

まったくこいつ、いったい誰に似たんだろう。

僕は起き上がってギターを取った。でたらめに掻き鳴らすとでたらめな色が世界に広がった。

その時だけ、不完全な僕の世界は完全に見えた。

誰か

世界の中で何かが終わりを告げた。席卷していた白の世界は砕け散る。ジャリジャリと。ギインと。バリバリと。不細工なドレミを奏でて罅割れて、地に落ちて死ぬ。少年は白を知った。黒を知った。透明を知った。赤を知った。知らない色はまだ多い。しかし青であることを選んだ。少年は若い。人間の寿命は五十年を軽く越す。浅はかな時間の過ごし方をしなければ、まだなんでもできるだろう。少年には翼がある。本当はみんな持っている。幼児はもちろん、学生も大人も男も女もみんな翼を持っている。だけどそれを育てるすべを白い世界の中でみんな忘れてしまった。少年にはやりたいことができた。いまはまだ不恰好に奏でている、誰かの安いギター。何年かかるかはわからない。だけど少年は一つ、翼を広げる方法を知った。少年はやがて飛び立つだろう。壁は高く、いくつもある。何度も落ちるに違いない。その度に傷だらけになりながら、少年はさらに高く飛ぶすべを知る。やがて大空を羽ばたき、人々は彼の姿を見上げる。そしてそのときこそ少年は大空を地に墜とす。世界は青く染まる。少年は一つ完全になる。白は破壊される。灰色はさらに濁る。黒は染まらない。青とはその程度の色だ。わかるやつにだけ、わかればいいだろう？

完全少年

少しあとに知ったことだが、俺のこれは共感性というらしい。

ある刺激に対して、本来働かないはずの別の神経が作用することで、音に色がついて見えたり、俺が特定の感情を持っている人間が赤や灰色に見える。

あのとき俺にとって世界が白かったのは、つまりはただそれだけのことだ。

足でリズムを取る。彼女を見る。あの頃と変わらない赤い笑みで頷いたのを確認して、俺はギターを鳴らした。

十三歳のあの日から一日も休まず練習して、もう三十一になって俺はやっとここまでやってきた。

あとは世界を俺色で染めてやるだけだ。

さあ、歌おうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4588r/>

不完全少年

2011年3月25日15時25分発行